

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

BAD LANDS バッド・ランズ

2023 年 / 日本映画

配給：東映、ソニー・ピクチャーズエンタテインメント / 143 分

2023 (令和5) 年 9 月 29 日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

Data

2023-113

監督・脚本・プロデュース：原田真人

原作：黒川博行『勁草』

出演：安藤サクラ / 山田涼介 / 生瀬勝久 / 吉原光夫 / 大場泰正 / 淵上泰史 / 縄田カノン / 前田航基 / 鴨鈴女 / 山村憲之介 / 田原靖子 / 山田蟲男 / 伊藤公一 / 福重友 / 齋賀正和 / 杉林健生 / 永島知洋 / サリ ngROCK / 天童よしみ / 江口のりこ / 宇崎竜童

👁️👁️ みどころ

黒川博行は『後妻業』(14年)で有名だが、『勁草』(15年)はオレオレ詐欺をはじめとする特殊詐欺に着眼した問題提起作。舞台はもちろん大阪だ。

“何でも自分で脚本を書く派”の原田真人監督は、主人公を男から女に入れ替える等の大胆な脚色を！それは、今が旬の名女優・安藤サクラを念頭に置いてのことだが、本作では全編出ずっぱりで、せわしなく歩き回る“受け子”のリーダーたるネリに注目！

ネリはなぜ東京から大阪へ？西成を拠点としてうごめく詐欺グループの総元締めはNPO 法人理事長の高城だが、ネリはなぜ今、高城の庇護下に？ネリの少女時代を含む壮絶な人生は少しずつ明かされるが、その中で今の才覚と行動力を身につけたのだから、その成長ぶりはすごい。それに引き換え、サイコパスを自称する弟(?) ジョーのバカさ加減は・・・？

特殊詐欺とは何？そのシステムは？組織性は？ヤクザとの絡みは？大阪人には、本作のセットも含めてそんなことは百もお見通したが、それでも本作は面白い。ネリを筆頭として、個性的な(クセの強い?) 登場人物たちをじっくり観察しながら、彼らの生態と生きザマ(死にザマ)をしっかりと観察しよう。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原作『勁草』VS 原田脚本！黒川博行 VS 原田真人！■□■

作家・黒川博行と聞けば、私はすぐに『後妻業』(14年)と結びつく。同作は現実に起きた事件をモデルにしているそうだが、何ともインパクトのあるそのタイトルは誰の目にも焼き付いたことだろう。私と同じ1949年3月に、私と同じ愛媛県に生まれた彼は、中学高校は違うものの、私と2ヶ月違いの同学年だ。『後妻業』以外のヒット作品を私は知らなかったが、本作の原作となった『勁草』を映画化しようと原田真人監督が持ちかけたの

は、同書が刊行された 2015 年の直後だったそう。同作は、高齢者をターゲットにした特殊詐欺に着目し、加害者側であるその仕掛け人を中心に、生活保護の不正受給を斡旋し巻き上げる貧困ビジネス、闇バイト、それらの犯行を取り締まろうとする刑事たちとの攻防を書き上げたクライムノベルだから、原田監督がそんな原作に惹かれた理由は十分納得できる。

他方、原田監督は自分が監督する映画の脚本は自分で書く主義(?)だから、『勁草』を映画化するについても、大胆に原作を変更したそう。もちろん、それは黒川博行氏の了解を得た上のことだろうが、そこで 2 人の間にトラブルはなかったの?それはともかく、原作を読んでいない私には、何がどう変わったのかわからないが、何と主人公を男性から女性に変更しているそうだから、すごい。これはきっと、『百円の恋』(14年)、『シネマ 35』186頁)と『万引き家族』(18年)、『シネマ 42』10頁)で 2 度の日本アカデミー賞最優秀主演女優賞を受賞し、『ある男』(22年)、『シネマ 52』180頁)で日本アカデミー賞最優秀助演女優賞まで受賞し、今や日本映画界を代表する“旬の女優”に成長している安藤サクラを、主人公のネリ役に起用するという構想と軌を一にしたものだろう。原田監督作品に安藤サクラが起用されるのは本作がはじめてだが、本作で 2 人の“個性”がいかなる化学反応を起こすのだろうか?それを楽しみつつ、原作『勁草』と原田脚本の違いをしっかりと確認したい。

■□■特殊詐欺とは?受け子とは?名簿屋とは?■□■

そう思っていると、本作冒頭は、私の事務所と自宅のすぐ近くの淀屋橋や大阪市役所周辺が舞台になっているからビックリ!そこを歩き回っている黒ずくめの女・橋岡煉梨(安藤サクラ)は、一体何をしているの?私は弁護士だから、詐欺罪の構成要件はよく知っている。世の中が複雑化するにつれて、人間の欲は変わらないものの、詐欺の形態は大きく変わっていった。というよりも、新種の詐欺がべらぼうに増えていった。その最たるものが特殊詐欺だ。2020年1月1日から、特殊詐欺の手口について、①オレオレ詐欺、②預貯金詐欺、③架空料金請求詐欺、④還付金詐欺、⑤融資保証金詐欺、⑥金融商品詐欺、⑦ギャンブル詐欺、⑧交際あっせん詐欺、⑨その他の特殊詐欺、⑩キャッシュカード詐欺盗(窃盗)の10種類に分類された。そして、特殊詐欺とは、犯人が電話やハガキ(封書)等で親族や公共機関の職員等を名乗って被害者を信じ込ませ、現金やキャッシュカードをだまし取ったり、医療費の還付金が受け取れるなどと言って ATM を操作させ、犯人の口座に送金させる犯罪(現金等を脅し取る恐喝や隙を見てキャッシュカード等をすり替えて盗み取る詐欺盗(窃盗)を含む。)のことだ。その手口はさまざまだが、ハッキリしているのは、そのターゲットが老人だということだ。

本作導入部でネリが淀屋橋や大阪市役所周辺を歩き回っていたのは、あるばあさんをターゲットにした特殊詐欺を指揮するため。ネリは受け子のリーダーとしてその任務を遂行していたらしい。現場でのネリの協力者は教授(大場泰正)だが、ネリたちに上から命令

を下している男は高城政司（生瀬勝久）。彼はNPO 法人「大阪ふれあい事業推進協議会」の理事長だが、これは“仮の姿”で、その正体は特殊詐欺グループの名簿屋だ。しかし受け子って一体ナニ？名簿屋って一体ナニ？それらの実態は本作でこれからじっくりと！

■□■ネリは三塁コーチ！それはなぜ？怒涛の一週間が開始！■□■

去る9月14日にオンライン試写で観た、婁燁（ロウ・イエ）監督の中国映画『サタデー・フィクション』（19年）は、“魔都”上海を舞台に、日本時間1941年12月8日午前3時20分（ハワイ時間12月8日午前7時50分）の日米開戦直前の一週間の動きを、スパイたちの暗躍を中心に描いた面白い映画だった。また、先日93歳で亡くなった「ゾウさん」こと遠山一氏が属していた4人組グループである「ダークダックス」が歌ったロシア民謡『一週間』も、庶民たちの一週間の生活を歌った楽しい歌だった。しかして、本作も受け子のリーダーであるネリを中心とする特殊詐欺グループ VS 大阪府警の、「月曜日の巫女さん」が登場する、ある年のある月の月曜日から翌週の月曜日までの一週間の動きを描く映画だから、それに注目！

本作冒頭の特殊詐欺のターゲットとして映っているばあさんは、実は、大阪府警特殊詐欺の捜査に携わる捜査一家の刑事・佐竹（吉原光夫）や HAWKS・TIGERS・BUFFALOES の三班からなる特殊詐欺合同特捜班を束ねる班長・日野（江口のりこ）たちの“おとり”として動かされていたらしい。したがって、受け子のリーダーであるネリが“goサイン”を出していれば、高城をトップとする特殊詐欺グループはたちまち一網打尽にされていた可能性が高いから、危険を察知して計画の実行を中止したネリの判断は絶妙だったらしい。ちなみに、ネリの通称は“三塁コーチ”だが、それってナニ？パンフレットによると、“三塁コーチ”とは「ネリが務める受け子のリーダー役のこと。金を受け取るために詐欺のターゲットと待ち合わせをする受け子に付き添い、指示を出す。本作のために作った造語。」だが、私の理解では、本作冒頭に見るネリの役割が、まさに立派な三塁コーチだ。つまり、三塁コーチはバッターがヒットを打った時、二塁ランナーが三塁を回ってホームに突っ込むかどうかの判断を瞬時に下さなければならない重要な役割だから、ネリはその適役だったわけだ。そんなわけで、これから始まる怒涛の一週間の第1日目の月曜日に、三塁コーチとしての立派な役割を果たしたネリは、高城の事務所に顔を出して、海外出張の清算を済ませた後、BAD LANDS で弟のジョー（山田涼介）と再会することに。

■□■BAD LANDS は？NPO 法人は？ふれあい荘は？■□■

本作冒頭の舞台は淀屋橋や大阪市役所周辺のビジネス街だが、高城やネリたちの本拠地は西成、駅で言えば JR 新今宮駅周辺のいわゆるドヤ街だ。高城やネリたちの本拠地として注目すべき舞台は、①BAD LANDS、②NPO 法人「大阪ふれあい事業推進協議会」の事務所、③ふれあい荘、そして④掛け子たちのアジトだ。

第1に、本作のタイトルになっている BAD LANDS はビリヤード場の名前。これはネリたちが戦場に出て行くための英気を養う場らしい。第2に、NPO 法人「大阪ふれあい事

業推進協議会」の事務所は、大きな倉庫全体だ。階段を上った 2 階にある事務所は「用心深く留守中に誰かが入り込んだり、ちょっとでもものが動いていたら気づく」という高城の性格を反映し、余計な装飾物もなくシンプルだ。事務所の続きにはもう一部屋あり、その部屋の金庫に印鑑や貴金属が保管されているらしい。第 3 に、高城の傘下にあるアパート「ふれあい荘」には、日雇い労働者や生活保護を受けている老人たちがたくさん住んでいた。生活保護受給者から生活保護費を徴収するのもネリの仕事の 1 つだ。なお、元ヤクザで、幼い頃からネりをよく知る老人である曼荼羅（宇崎竜童）は、ときどき幻覚症状の発作を起こしていたが、本作後半からは大きな役割を果たすので、その存在に注目！また、教授も「ふれあい荘」の住人で、博識ながら負け組に堕ち、今はネリの指示で特殊詐欺の受け子をしながらかつて生きているらしい。第 4 に、掛け子たちのアジトに注目だが、そのおどろおどろしい雰囲気は、あなた自身の目でしっかりと！

■□■ネリの知力と生命力の源泉は？弟との対比にも注目！■□■

本作では、高城配下の特殊詐欺グループ VS 大阪府警合同特別捜査班の対立構図の他、曼荼羅や弟のジョーが登場！さらに、グローバル・マクロ投資家の大物にしてゴヤ・コーポレーション会長である胡屋賢人（淵上泰史）、賭場の帳付を務めるほか、黒い仕事を仲介する謎多き女・林田（サリ ngROCK）、特殊詐欺グループの道具屋である新井ママ（天童よしみ）等が登場し、彼らの動きを通して、少しずつネリの過去が明らかにされていくのでそれに注目！

ネリは“実の父親”に裏切られ、若くして母親を亡くしたそうだが、“壮絶”としか言いようのないその実態は？また、ジョーはネリの弟だが、今は随分思慮深くなったネリと対照的に、今でもジョーは無鉄砲な凶暴性と、子供のように純真無垢な一面を併せ持っていた。自称「サイコパス」の彼には、2 回の服役歴もある。ジョーは“血の繋がらない”姉のネリに対して異常な愛を抱いていたが、そうかと言って、ネリにとって“実の父”のような（？）高城を殺してしまっているの？また、ネリはかつて東京で胡屋の庇護下にいたそうだが、なぜネリはそこを離れて今は高城の配下になっているの？東京でネリの身を蝕んでいた胡屋は、今なお、逃げたネリの行方を追って執念を燃やしていたが、それは一体なぜ？他方、大阪府警の合同特別捜査班の網は次第に迫ってきたらしい。しかして、いつどこに踏み込めば、特殊詐欺グループを一網打尽にすることができるの？

黒川博行の原作を原田監督が大胆に脚色した本作の中盤では、ネリをはじめとする個性豊かな登場人物たちが、この社会の底辺でいかうごめきながら生きているかをしっかり観察したい。

■□■賭場で借金を！そのトラブルが次のハプニングへ！■□■

ヤクザ映画や座頭市の映画を見ていると、時々、花札を使ったサイコロ博打の風景が映し出されるが、今でも某所ではそんな賭場があるらしい。それは、岩下志麻が主演した『極道の妻たち』シリーズを見てもよくわかる。しかして、本作前半には、ちょっとした

気分転換(?)で、ジョーとネリが残間均(前田航基)、残間卓也(山田蟲男)の兄弟と共に、わざわざ車に乗って賭場に駆けつける風景が描かれるので、それに注目!

賭け事には時々“ビギナーズラック”なるものがあるが、どうも本作に見るジョーがそれだったようで、作家の黒川博行氏本人もエキストラとして参加している博打の現場で、当初ジョーは一人勝ち!ここは当然、“勝ち逃げ”すべきところだが、“サイコパス”というより、どちらかというと“単純バカ”のジョーにはそれができなかったため、その後はドツボにはまっていくことに・・・。

■□■高城の事務所でハプニングが勃発! 2人の逃避行は? ■□■

賭場の帳付を務めるのは林田だが、こちらはプロ中のプロだから、どんどん負けが込んでいく弟ジョーの代わりに、支払いのしっかりした姉のネリを連帯保証人にさせたうえで、ネリが中座することを認めたのはさすがだ。ネリが“お楽しみ”の現場を去って、急遽高城の事務所に戻ったのは、ある“異変”を聞きつけたためだ。結果的に、賭場で大きな借金を背負ってしまったジョーも戻ってきたが、そこで追い詰められたジョーと残間弟がカチコミする中で起きた一大ハプニングとは!?

高城とネリは互いに大きな確執を抱えていたが、それを超える信頼関係もあったようで、高城は将来の後継者はネリしかいないと決めていたらしい。しかし、執拗にネリの在りかを探す東京の胡屋からの追及の手が大阪まで伸びてくると・・・?高城はもちろん、ネリも立派な大人だし、計算も早いから、今の事態をそれなりに読んでいたが、単純バカのジョーにはそんな計算は苦手。目の前の状況を見ながら、自分の感性でその場その場の行動を決めていたから、それが大きく狂った場合は・・・?

今、目の前で高城とネリが争い、高城の手で痛めつけられようとしているネリの姿を見ると、ジョーは一気に暴走したからバカは怖い。しかし、コトが起きてしまったのは事実で、高城の死を覆すことはできない。高城にはヤクザのバッグがついていることはわかっていたが、事務所の中や金庫の中を探してみると、彼は想像以上の大物だったらしい。長い間、携帯電話での連絡がつかなければ、直ちに組員が乗り込んでくるシステムもわかっている。すると、今はジョーと組んで、預貯金をすべて現金化し逃走するしかない!ネリもやっと2人の逃避行を覚悟したが、その具体的な方法は?そこでネリが頼りにできるのは曼荼羅だけだ。しかし、現金を持って海外へ飛ぶには林田の手助けも必要らしい。本作終盤ではそんなハラハラドキドキの中で展開される、ネリたちの“ワルぶり”をしっかりと確認したい。

■□■種々のセットに注目! ボケ老人曼荼羅の急変身にも注目 ■□■

本作は143分の長尺だが、①高城殺しの後、ネリとジョーの2人が長い間過ごすことになる高城の倉庫、②ジョーが借金を抱え込む賭場、③胡屋が開催する投資家向けの華やかなショーの会場等々、撮影の現場にはかなりこだわっていることがわかるから、決して長いと感じることはない。

他方、本作前半は、幻覚症状の発作を起こすばかりの“手のかかるボケ老人”だった曼荼羅が、ネリとジョーの逃避行を手助けするについては一転してフル活動するので、それに注目！それにしても、1973年に「ダウン・タウン・ブギウギ・バンド」を結成し、『港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ』等を大ヒットさせていたバリバリのロックンローラーが今、70代にして曼荼羅のような老人役をしっかりと務められるとはたいしたものだ。

■□■ジョーの行き先は？ネリの才覚と行動力はずっと健在！■□■

本作後半における、急変身が目覚ましい曼荼羅に対し、ジョーの方は、高城を殺し、ネリと共に逃避行の計画を練っている間も、それまでと同じノーマルで動いているから、これもある意味すごい。もっとも、ネリの方は今後ジョーと行動を共にする気は全くなく、カネを折半して逃走が成功すれば、今後は一切会わないと決めていたから、その才覚と行動力はクライマックスに向けてもさすがだ。

ところが、そんなジョーがカネを受け取った後に向かったのは、海外ではなく胡屋のパーティー会場だったからビックリ！去る9月23日に観た『ジョンウィック』シリーズの最終章たる『ジョンウィック：コンセクエンス』（23年）は、“ガン・フー”を中心とした銃の乱射の回数が際立っていたが、特殊詐欺をテーマとした本作でも、胡屋が主催している華やかなパーティー会場へのジョーの乱入と拳銃の乱射によって、あっと驚く銃撃戦（？）が発生するので、それに注目！

これにて胡屋はもとより、ジョーの短く儂い命もジ・エンドとなってしまったが、姉のネリの方は曼荼羅が去った後、いつの間にか親友状態（？）になってきた林田の助けを借りて、海外逃亡用の現金化を着々と進めていた。そして、冒頭に見たのと同じような素早い足取りで、高城殺しの報復を目指すヤクザたちや、特殊詐欺グループの一網打尽を目指す大阪府警特殊詐欺合同特捜班を撒きながら歩いていたが、その行き先は？これまで見せてきたような、ネリの才覚と行動力があれば、きっとこれから先も大丈夫だろう。使い慣れない大阪弁を駆使した安藤サクラの熱演に拍手を送りつつ、タププリの現金を持つてのネリの海外脱出を見送りたい。

2023（令和5）年10月5日記